

南のひと 18

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島の種子取祭では、毎年太鼓を叩く行列の中で、赤い若衆の着物を着てシヨンコー（鐘）を叩く役が小学生の男子生徒の中から1人決められる。

新井結大くんは、小学5年生の時にその役を演じた。小さい島の小規模校、当時5年生のクラスは全員で5人。その内、男子は彼1人だった。

科学が好きで、本が好きな彼は休み時間は読書をして過ごすような、どちらかというと無口で静かな少年だった。

普段あまり目立たない彼だが、当時彼のお母さんから聞いたエピソードで面白い子だな、と思わせる話があった。それは、彼が読んでいた機械工学の本から東海大学の教授に手紙を書いていたという話だ。彼は興味のある人と繋がるために自分の意志で行動を起こせる人なのだ。

現在中学1年生になった結大くんに当時の話を聞きに行った。

「なぜ小学5年生の時、東海大学の教授に手紙を書こうと思ったのですか？」

「図書館で偶然出会った本がきっかけでした。ソーラーカー（太陽光の力で走る車）の本だったんです。僕は元から科学に興味があり、ソーラーパネルや車にも興味があったので、この本を読んだ時に、僕もソーラーカーを作って、競争してみたい。と思ったんです。本の中で、東海大学の車がレースで優勝するのですが、自分たちが優勝したのではなく、このプロジェクトを応援してくれた様々な日本の企業や工場が優勝したのだ、というようなことが書いてあり、それを読んだ時に僕はこの大学で学びたい、このチームの一員になりたいと思ったんです」と当時の心境を教えてくれた。この思いは中学生になった今も変わらないようだ。

最後に、「小学2年生の頃からずっと男子1人で寂しいと思ったこともあったけど、1人だったから読書にも出会えたり、好きなことも見つかった。結果良かったと思っている」と清々しい表情で話してくれたのが印象的だった。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。